考えウマシ

第八十三回『ザリガニの鳴くところ』と『台北プライベートアイ』からの『緑の歌』

女に暴力をふるう男は、沼地で野垂れ死ぬ。

弦楽器イルカ⇔友人

目次

はみだしウマシカさん　その 27 1
第八十三回『ザリガニの鳴くところ』と『台北プライベートアイ』からの『緑の歌』〜G から U へ〜 2
第八十三回『ザリガニの鳴くところ』と『台北プライベートアイ』からの『緑の歌』〜U から G へ〜 6

はみだしウマシカさん　その 27

第十回ＢＵＮ１－ＧＰ 優勝ブンザイ（ エントリー数１ ）

どうも、考えるブンザイです。
開け師になりたい。
閉じ師じゃなくて？
戸を開けて、お線香をあげて、両手を合わせる。亡くなった人の声に耳を澄まし、その歴史を学ぶ。恨みを継ぐのではなく、乗り越えるために。そうしないと、亡くなった人とのつながりが腐ってしまう。腐ったつながりは目に見えない形で世界を澱ませ、人々を歪ませる。そして歪んだ人々は、同じ過ちを繰り返してしまう。
仏壇の広告？
みみずは、その澱みを浄化するために、腐ったつながりを食べるんだ。でもみみずが食べきれないほど、腐ったつながりが増えすぎると、太って肥大化したみみずが苦しみ暴れて、厄災が起こる。肥大化したみみずを鎮めるには、締め切った戸を開け、澱んだ空気を開放し、虫払いをしなきゃならない。
でも多忙な現代人は、お墓参りに行く時間もないし、里帰りラッシュに巻き込まれたり大変ですよね？
そんなときにはコレ、厄災用防虫剤モチューダ。今ならもうひと箱ついてきます！
ナスに割り箸でも代用できますよ。じゃ、次のブンザイ考えるから、あんたとはやっとれんわ。
どうもありがとうございました。

第八十三回『ザリガニの鳴くところ』と『台北プライベートアイ』からの『緑の歌』～G から U へ～

Uが勧めてくれた『ザリガニの鳴くところ』と『台北プライベートアイ』は、どちらも文学とミステリーの融合した作品だったけど、これを比較したら最近のメディア問題から『緑の歌』まで書け抜けられそうだったから、今回はそれでやってみたい。

往復書簡だからネタバレは全く気にしないし、今回は途中からだいぶ粗びきですが、ウマシカだから仕方ない。

『台北～』は、台湾版『キャッチャー・イン・ザ・ライ』だと俺は思ったし、展開に引っかかるところもなかった。

「犯人はヤス」ってミステリーの定石通り、読者も主人公も見落としていた事柄に復讐されるって展開はありつつも、漱石やカフカのような「都市と人間」というテーマを主軸に置いた、ミステリー風純文学だと思う。

一方、『ザリガニ～』は文学的で重厚なミステリーだし、濃厚な湿地の描写や、カイアの苦難に満ちた人生にも共感できた。

カイアはまともな教育を受けていないから、人生の重大な局面で、人道ではなく野生に従って決断してしまうのも道理だと思った。さらに差別が当たり前の１９６０年代のアメリカ社会にあっても、法に則り一定の人権は尊重されており、カイアのような野生人も同じ人間という理由で人道的に扱われたことは、深く考えさせられる話だと思う。

野生の側が法を拒んでも、法の側が勝手に野生を保護することは、果たして正義なのか。

『ザリガニ～』は超約すれば「女に暴力をふるう男は、沼地で野垂れ死ぬ」って話だから、はじめから帯に書いた方がいいと思うんだよ。男はしょっぱな死んでるから別にネタバレでもないし、変に隠すとムシ考な読者はヒューマンドラマって勘違いするから。

だって、因果応報とか順法精神とか、罪を犯したら罰を受けるって話では絶対にないから。

最近の風潮だと、普通この流れなら罪に耐え切れず自白するシーンがありそうな気がするけど、野生に法は関係ない。ヒューマンじゃなくてワイルドドラマだと思う。

だから、カイアにはイライラしつつも最終的には納得したけど、テイトには納得できなかった。
しかもあまりにも納得できなくて、途中で読むのやめて避妊具について調べたし。驚いたことに避妊具は紀元前からあって、１９６０年代の思慮深いカップルなら十分避妊できたはずってこともわかった。

だって、『ザリガニ〜』を『ノルウェイの森』に置き換えたら、いくら望んでも絶対手に入らなかった直子が、むしろ途中で緑になって僕を求めてくるって話だよ。直子と緑がもし一人だったら、僕には幸せしかないのに。でもテイトは直緑を唐突に冷めて諦めるんだよ？ なんで？
これがもしリアルを追求する純文学だったら、テイトとカイアが 10 代で結婚してから、性に溺れて勉学に手がつかないとか、スカッパ―との嫁舅問題で関係に亀裂が入るとかの展開はあっても、最も熱情に狂い盛ってる 20 歳前後にヤリもせず急に距離を取るのは現実的じゃない。
危険を恐れて人目から隠れるカイアを見たら、むしろ彼女を心配して父親に守ってもらうために結婚を決意するのが僕だと思うし、そうでないならあの登場人物全員、俺にとっては共感できないヤツらのどうでもいい話になる。
今社会問題になってる、芸人やサッカー選手やテレビ制作者やその被害者たちと同じで、俺にとっては全員知らない人たちのただ薄気味悪い話だ。関係して騒いでるヤツ全員、この国の文化の進歩を妨げてるムシ考だから、極論みんなこの国の平和のために原発作業員として御国のために働けとしか思わない。

ＳＮＳなんて本来、免許証とかの個人情報と結びつけたアカウントと、完全に匿名なアカウントとを区別して、拡散機能などに違いや制限を設ければいいだけの話だ。
それをしないのはただ、ＳＮＳを現代のコロシアムや戦場にして、人命より集客を優先してるだけにすぎない。某ドラマで「ＳＮＳは無意味」って歌ってたけど、無根拠な垂れ流しを炎上って取り上げて儲けてるのは、テレビでありマスコミに他ならない。

20 年以上前、変な雑誌の巻末ハガキ投稿欄が、投稿者同士のケンカで荒れまくっているのを読んだことがある。はじめは意味が分からなかったが何回か読むと、ケンカが盛り上がるほど投稿者などが雑誌を買い続ける効果があることに気づいた。投稿者同士のケンカも本当に憎しみ合っている者から、遊び半分でケンカしている者までいた。
ＳＮＳもそれと大差ない。炎上って影も形も定義もない都合の良い炎を操って集客しようとしたマスコミは、ミイラ取りよろしくその炎に焼かれ始めた。今まで腐るほど言ってきたつまらない予言シリーズだけど。

でも 12 年前に俺が遊びで書いた芸能人勝手にお悩み解決コーナーが、今になってちゃんと予言的中してたし、ウマシカのつまらない予言シリーズには一定の実績があるよ。

話が脱線したけど、そういう意味で『ザリガニ〜』は読み応えのある重厚で文学的なミステリーではあったけど、退屈さも含めて沼地に引き込むような純文学ではなかった。
テイトが諦めたあの瞬間から、俺にとっては『イニシエーション・ラブ』と同じ、単にミステリーの筋書きのために置きにいく小説になった。あれもUが勧めてくれたけど。前半と後半で別の話になるところも一緒だと思う。

じゃ、もしテイトが中盤で諦めなかったら、『ザリガニ〜』はあの後どうなったんだろう。
その答えが、『緑の歌』にあると思う。これ、台湾と日本を舞台にした漫画だし、村上春樹や細野晴臣といった日本の文化がたくさん出てきて帯まで書いてるから、Uにお返しの意味でお勧めします。上下巻、ぜひ読んでみて。
男の死、遺体、若者の淡い恋心、人間関係のもつれ、将来への不安、詩など、『ザリガニ〜』と同じキーワードを持ち、なんなら途中まで似たようなシーンもあるから、テイトが諦めなかったらたぶんこんな感じになっただろうなって、純文学的な退屈を楽しむ作品ですよ。どっちもいい国だなって思えるしね。

こっからあえて跳躍するけど、松本が出てた番組の視聴率が２％台から、高くても５％なかったって記事を読んで（ もちろん視聴率が絶対的価値じゃないにしても ）、これを国の宝とかいうヤツは一体どの国に住んでんだろうって思うよ、マジで。
ネット調べたら、某宗教、某在日、某裏社会との関連も確かにあるようだし、どちらにしろ狭い島国の更に５％未満の矮小な国に住んでる住民が妄信してるんだろうね。
『半沢直樹』最終回は視聴率 40 ％越え、『鬼滅〜』の映画は興収４００億越えって記録見たけど、別に国の宝なんて大げさに言われないじゃん。
だとしたらそのお宝、恥宝だよね？ ウマシカ造語だけど。

なんでわざわざこんなん書くかっていうと、Uが勧めてくれた「令和の虎」は、悪いけどやっぱ観れないと思うから。
例えばドッキリも、演者のその顔は本当に焦ってるのか、それとも焦ってる演技なのか、焦ってる演技がちゃんとできてるか心配で焦ってるのか、焦った演技をいつすべきか不安で焦ってるのか。演者の感情に気が散って内容が入ってこないから、俺は観ない。
「令和の虎」とか「ＢＤ」とかも同じで、共感できないヤツの共感したくない焦りに俺は関わりたくない。
でも、そういうの好きな層が５％未満この国にはいて、そういう層が好んで松本の番組を観るのかなって思うし、みんなに人権があるからそれは仕方ない。

『半沢直樹』って、銀行のイメージが悪くなりすぎるから、スポンサーに配慮して、続編がずっと作られなかったと俺は普通に思ってる。いろいろ表向きの理由はあったけど。

町工場の社長の自殺を武勇伝みたいに語る大和田はイメージが悪すぎるから。「銀行員は社長を自殺させて一人前」って記事も当時あったし。

その証拠に、第二部では半沢と大和田が仲間になった。あれただの銀行イメージアップ作戦だよね。尊敬する父親の自殺に深く関わって更にその死を己が武勇伝のように語るヤツと仲間になった時点で、俺にとっては共感できないヤツらが土下座したり、足や髪の毛引っ張ったりするどうでもいいドラマになった。

もともと原作者の人命なんて軽すぎて、自分らの収入の前では大和田にとっての社長同様、ゴミ同然に扱うのがテレビだしね。

だって、福島の小児甲状腺がんの手術後、９．７％、21 人の子が再発してるって第 66 回日本甲状腺がん学会での報告は、俺が知る限り非営利のインターネット・メディア１社しか報道してない。国策で始めた原発も、いよいよ本格的な被害の報告が出始めたから、福島の御用会議にはＮＨＫまでカメラを入れなくなったって話だ。

自分の身は自分で守るしかないし、振込詐欺をＡＴＭで未然に防いで表彰されるのと同じ意味で、「テレビは有害」ってポスターをテレビ局にちゃんと貼るべきだと思う。「テレビは有害」って認識はもはや必然だし、収益の流れも可視化して、タバコや酒と同じく成人規制と適量接種を推奨したほうがいいよ。いつものつまらないウマシカ予言シリーズね。

今回はこんな感じ。どうかな？

第八十三回『ザリガニの鳴くところ』と『台北プライベートアイ』からの『緑の歌』～U から G へ～

ザリガニの感想ありがとう。全米で２年連続一番売れたというから、もっと万人受けすると思ってた。純文学をたくさん読んだ人には、真新しくないのかもしれない。

aiko のカブトムシってあるじゃん。女の子の気持ちをカブトムシに例えるって絶賛されてるけど、俺は子供の時はカブトムシはかっこいいイメージしかなくて、大人になったら触らないくらい気持ち悪いものになったから、全く共感できないのよね。aiko は好きだし、カブトムシの歌詞もカブトムシの部分以外は好きだったけどさ。

カイアはザリガニと言われても、気持ち悪くて共感できないわな。俺はカイアにＡＩと通じるものを感じた。美しい自然で育つと、コアな部分では自然が抜けなくて、相手を殺すことも避けられないのかと。

テイトについてはあまり注目していなかったけど、カイアの家族は結局、全員が湿地を捨てて外に出た、テイトは湿地に残ったけど、本当の意味で湿地の人間ではなかったね。カイアの湿地研究は湿地の中から湿地の世界を描くものだが、テイトは科学を湿地に用いているからね。この辺の対比も作者の意図通りだと思うし、そんなテイトにカイアは心を開ききれていないし、最後にテイトが気づいたのは、やはりカイアとの間にある壁だと思う。

ザリガニの鳴くところは、今の世の中に特に日本のワイドショー的な話題に対して、問題提起していると思ってる。自然界ではオスとメスの差は明確に存在し、そこには優越も差別も無い。ただ自然な差異があるだけだ。今、女子校にもトランス男子が入学できるようになってきて、人間社会は性差がなくなってきている。平等であることと、自然であることは、今どきの文明では別々なのかもしれない。俺は違和感を感じるけど、その方向に流れているし、湿地の世界はますます異常な世界になっていくのだと思う。

考えるウマシカ～第八十三回 『ザリガニの鳴くところ』と『台北プライベートアイ』からの『緑の歌』～

著　　弦楽器イルカ

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社